

も可有之歟根本三尺餘も蘇鐵の如く、夫より末に薄一本には、常の薄の如く數百本生ず、廿七本共に如此、一本に千本宛も生ると、古來よりの説也、穗の出る事も野に有と同事也、往古より人さわる事ならず、

〔類聚國史^{三十一}〕大同三年九月戊戌、幸神泉苑、有勅、令從五位下平群朝臣賀是麻呂作和歌曰、伊賀爾布久、賀是爾阿禮波、可於保志万乃乎。波。奈。能須惠乎、布岐牟須悲太留、皇帝^{○平}歡悅、授從五位上。〔大和物語^上〕故式部卿の宮のいではのごに、ま、ち、の少將すみけるを、はなれてのち女す、き。にふみをつけてやりたりければ、少將、

秋風になびくをばなは昔見し袂ににてぞ戀しかりける、いではのごかへし、

袂ともしのばざらまし秋風をなびく尾花のおどろかさずば

〔古今和歌集^四〕題しらす

平貞文

今よりはうゑてだに見じ花薄。ほにいづる秋はわびしかりけり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ありはらのむねやな

秋の野の草のたもとか花す、きほに出てまねく袖とみゆらん

〔源氏物語^{四十九}〕かれなる前栽の中に、おぼなものよりことに、手をさし出てまねくがおかしうみゆるに、またほに出さしたるも、露をつらぬきとむる玉のを、はかなげにうちなびきなど、例のことなれど、夕風なほあはれなりかし、

〔枕草子^三〕草の花は

これにす、きをいれぬいとあやしと人いふめり、秋の野のおしなべたるをかしさは、す、きにこそあれ、ほさきのすはうにいとこきが、朝ぎりにぬれてうちなびきたるは、さばかりの物やはある、秋のはてぞいと見どころなき、色々にみだれ咲たりし花の、かたもなくちりたるのち、冬の